様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２９４６

研究課題名（和文）流派形成史から見るインド密教における観想法の構造解析

研究課題名（英文）The structural analysis of visualization in Tantric Buddhism as seen from the point of view of cycle's formation history

研究代表者
松村　幸彦（Matsumura, Yukihiko）

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：７０８０３０７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まずはシャーキャミトラ著『アヌッタラサンディ』の再校訂と訳注作業を行った。次にそれらを用いながら同テキストを始めとする父タントラ系聖者流の究竟次第とサロールハヴァジュラ著『ヘーヴァジュラサーダノーパーイカー』やスラタヴァジュラ著『ヴァジュラプラディーパー』を始めとする母タントラ系統のヘーヴァジュラ系究竟次第の内容解析を行い、それらを比較した。究竟次第的観想法の内容としては「念誦」と「清浄光明」に着目し、それらの儀礼に見られる聖者流とヘーヴァジュラ系共通の内容を明らかにし、ヘーヴァジュラ系が時代を経るに従って聖者流の実践や解釈を取り入れてきた可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究では、父タントラ系と母タントラ系の関係について言及するものはあったものの、両系統は別個に研究されることが殆どであり、特に聖者流に関しては空の思想に基づくことから父タントラ的として述べられることが多かった。近年、聖者流の実践にも母タントラ系のものが見られることが指摘されることがあったが、ヘーヴァジュラ系と聖者流の影響関係に着目し、その中でも観想法に焦点を当てた研究はなかった。そこで、本研究で行った聖者流とヘーヴァジュラ系の究竟次第を解析・比較することで得られた成果はインド密教の歴史的展開に関して今までにない視点による有益な知見を提供することが出来、十分に意義のあるものである。

研究成果の概要（英文）：Firstly, I have made a critical edition and annotated translation of the Anuttarasandhi. Using them, I have examined the Completion Stage of the AArya school such as the Anuttarasandhi, and examined the Hevajra Cycle such as the Hevajrasaadhanopaayikaa written by Saroruhavajra, the Vajrapradiipaa written by Suratavajra and so on. Next, I have compared with the both Cycle Completion Stages, gaving particular attention to the recitation of mantras and the visualization of prabhaasvara. I, moreover, have shown the common contents of the AArya school and the Hevajra Cycle, and have indicated that the Hevajra cycle may had introduced the practices and teachings of the AArya school by degrees.

研究分野：インド密教

キーワード：ヘーヴァジュラタントラ　聖者流　究竟次第　念誦　ヘーヴァジュラ系

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

インド密教はその長い歴史を初期（3 世紀～7 世紀頃）・中期（7 世紀～8 世紀頃）・後期（8 世紀～13 世紀頃）の三つに区分することが出来、初期密教では主にダラニなどを唱える除災招福を目的とした儀礼が中心となっていたが、中期密教の時代になると身・口・意を用いたヨーガの実践方法が整備され、それによって現世において仏と行者が一体となり悟りを得て解脱することが出来るとされた。後期密教の時代になると、中期密教の内容がさらに発展し、ヨーガによる実践によって今生での解脱を目的とするのはもちろんではあるが、その内容に性的な要素や排泄物の摂取など今までの仏教では到底認められなかったような複数の要素が加えられた。また中期密教の時代と比べて多くのタントラと呼ばれる聖典やそれに付随する儀軌などが作成された。

後期密教の聖典は『秘密集会タントラ』を始めとする方便・父タントラ系と『ヘーヴァジュラ・タントラ』や『チャクラサンヴァラタントラ』などの般若・母タントラ系の二つの系統に分けられ、その実践階梯として生起次第と究竟次第からなる二次第がある。生起次第の実践では仏の三身を対象とし、究竟次第は大楽を対象とした実践であり、その方法として生起次第は行者とその観想したマンダラの合一を図る。究竟次第は行者の身体に脈管やチャクラを観想する生理学的な要素を含んだ実践を行う。またこれらの両系統の聖典の下には特定の流派が形成され、その下で聖典に付随する儀軌や註釈書などが多く作られた。それらを基にして逆にタントラ聖典が編纂されることもあったとされ、インド密教の儀礼や思想の歴史的展開を解明するためには、ある特定の聖典を奉じる流派を採り上げた研究は必要不可欠であると言える。

父タントラ系聖典『秘密集会タントラ』を奉じる二大流派としてジュニャーナパーダ流と聖者流があり、従来の研究では、前者がより母タントラ系の影響を受けており、後者が空の思想に基づくことから父タントラ的であるとされてきた。しかしながら最近、ガナチャクラなど母タントラを起源とする儀礼が聖者流の主要な実践を占めていることが静春樹博士、種村隆元教授の一連の研究によって明らかになった。したがって、これまで続いてきた父タントラ・母タントラという二つのグループを基準とする聖典あるいは流派区分だけでは後期密教の全容を解明していくためには不十分であると言わざるをえず、新たな視点にもとづくアプローチが必要となっている。そのなかでも、「ヘーヴァジュラ」系と「秘密集会」系聖者流との関係が注目される。両者は「金剛念誦」や「自加持」、「五次第」といった共通の術語を用いており、ヘーヴァジュラ系と聖者流双方のテキストを用いたアプローチは有効な手段の一つである。

本研究で対象とする聖者流の著名な学僧シャーキャミトラが著したテキストである『アヌッタラサンディ』は同流派の生起・究竟次第ナーガールジュナ著『パンチャクラマ』に第二次第として数えられている。しかし、本来は単独の文献であることが苫米地等流博士によって明らかにされ、さらに『パンチャクラマ』は母タントラ系聖典『サマーヨーガタントラ』などとの平行箇処なども指摘されることから、聖者流と母タントラとの関係を裏付ける上で重要な文献の一つである。しかしながら、母タントラ系、特にヘーヴァジュラ系との関連を検討する取り組みは不十分であり、聖者流とヘーヴァジュラ系の両者を用いたアプローチが求められており、父タントラ・母タントラを別個に研究するだけではなく、両系統の影響関係に着目し、新たな視点でインド密教の形成過程を解析する研究が必要である。

２．研究の目的

本研究では、サンスクリット写本を用いたインド密教文献の解析を行うと共に、インド密教が整理・統合へと至る過程に焦点を当て、その展開と特徴の一端を明らかにすることを目的とする。その中でも、父タントラと母タントラの両系統の内容と展開を個別に分析するだけではなく、それらの影響関係に焦点を当てることで、それぞれの系統の特徴の一端を明らかにすることが可能なだけでなく、インド密教の歴史的な動きを総合的に解析することが出来ると思われる。

３．研究の方法

本研究では、インド後期密教の実践階梯の一つである二次第の内、究竟次第に着目する。まずは父タントラ系統の聖典『秘密集会タントラ』を奉じる二大流派の一つである聖者流の究竟次第の儀礼内容を解析する。そして母タントラを代表するタントラ聖典の一つである『ヘーヴァジュラ・タントラ』の究竟次第を採り上げてその内容解析を行う。さらに聖者流文献に説かれる内容との類似箇処や平行箇処の同定や比較を行う。これによって、聖者流の説く儀礼がヘーヴァジュラ系観想法に継承されている点、インド密教儀礼の歴史的展開の中で遂げたヘーヴァジュラ系独自の発展の特徴を明らかにする。研究を行う上で用いる文献は、聖者流に属する観想法文献（シャーキャミトラ著『アヌッタラサンディ』、『チャルヤーサムッチャヤプラディーパ・ナーマ・ティーカー』、ナーガールジュナ著『パンチャクラマ』、アーリヤデーヴァ著『スヴァーディシュターナプラベーダ』・『チャルヤーメーラパカプラディーパ』）所説の究竟次第的観想法を採り上

げる。そしてヘーヴァジュラ系の観想法文献（スラタヴァジュラ（ジャーランダリ）著『ヴァジュラプラディーパー』、ラーフラグプタ著『ヘーヴァジュラプラカーシャ』）の究竟次第に相当する箇処を採り上げ、それらを用いた聖者流とヘーヴァジュラ系の究竟次第の内容解析を行う。

４．研究成果

（１）『アヌッタラサンディ』の再校訂・訳注作業と内容解析

本研究では、まず聖者流の究竟次第の一つであるシャーキャミトラ著『アヌッタラサンディ』の再校訂と訳注作業を行った。当該テキストは 87 偈から構成され、聖者流の五次第である『パンチャクラマ』を構成する第二次第としても著名な文献である。その内容には聖者流の他の文献にも登場し、彼らの用いる用語として著名な「三空」や「三智」、さらに四番目の一切空という状態、つまり清浄光明が最高の状態、解脱の因であると説かれる。また、心の状態として 80 の状態などが列挙されている。これらはすでに従来の研究で指摘されているところではあるが、ヘーヴァジュラ系の究竟次第と比較作業を行うために、訳注作業を行う中でそれらを整理するとともに再確認することは必要な作業であった。これによってヘーヴァジュラ系と比較する上での問題点として「清浄光明」や「三智」といった教理の位置を明確にすることが出来た。

（２）究竟次第における儀礼としての念誦

インド密教における実践の一つとして念誦があるが、これはマントラを唱えながら観想を伴って行う実践であり、初期密教はもとよりヨーガによる内的な実践を重視する後期密教においても重要な構成要素の一つである。それが説かれる儀軌や聖典にも様々あるが、その一つとして究竟次第に数えられることがある。本研究で扱う文献の一つである、ヘーヴァジュラ系の五次第の一つ『ヘーヴァジュラプラカーシャ』の第二次第に「金剛念誦次第」があり、『パンチャクラマ』にも第一次第として数えられる「金剛念誦次第」がある。そこで、ヘーヴァジュラ系と聖者流の各々の儀礼に説かれる内容の影響関係を考察する上でも詳細な検討が必要な儀礼である。

そこでまずは、『ヘーヴァジュラ・タントラ』に説かれる念誦を整理し、その他本研究の対象となるヘーヴァジュラ系観想法文献に見られる念誦の特徴を明らかにした。その上で、『パンチャクラマ』の「金剛念誦次第」の内容と比較し、その特徴などを明らかにした。『ヘーヴァジュラ・タントラ』では第 2 章第 10 節に念誦に関して説かれているが、その内容は非常に簡潔である。そこでは修法や念誦の際に用いる数珠の材質や資具が儀礼の目的に応じて列挙されており、例えば敬愛法では赤い旃檀を数珠に用いるし、調伏法ならムロクジの木、硬直法なら水晶などが列挙される。しかし、ここで述べられる念誦はあくまでも世間的な悉地を得るためのものであり、観想を伴った念誦について説かれているわけではなかった。

続いて同タントラの成立にも深く関わったと目されるヘーヴァジュラの伝承者の一人サロールハヴァジュラや彼の師であるアナンガヴァジュラの著したヘーヴァジュラ系の観想法について整理することもヘーヴァジュラ系の念誦法を明らかにする上で必要不可欠な作業であるため、彼の著作『ヘーヴァジュラサーダナ』やサロールハヴァジュラ著『ヘーヴァジュラサーダノーパーイカー』所説の念誦法、『ヘーヴァジュラサーダノーパーイカー』への註釈書という形をとっているスラタヴァジュラ著『ヴァジュラプラディーパー』、ヘーヴァジュラ系五次第であるラーフラグプタ著『ヘーヴァジュラプラカーシャ』についてもその関連する箇処を解析した。それによると、サロールハヴァジュラは、観想に疲れたヨーガ行者に関して世尊と配偶尊の間で循環するような形態のマントラの観想を行うように説いていた。アナンガヴァジュラは金剛念誦と塊の念誦という二種類の念誦を説いており、金剛念誦は『ヘーヴァジュラ・タントラ』所説の世尊ヘーヴァジュラの真言などを行者の心臓の上の日輪の上に観想するように規定しており、その際マントラの文字は上向きで輪形を形成している。塊の念誦については、「瞋恚の言葉」を唱えるように述べられるが具体的な内容は示されていなかった。『ヴァジュラプラディーパー』以降のヘーヴァジュラの伝統の中では、サロールハヴァジュラの説く念誦については、鞦韆念誦という名称が付され、さらに塊の念誦・三摩耶念誦・金剛念誦という三種類の念誦も儀礼の要素として説かれるようになった。その一方でアナンガヴァジュラは鞦韆念誦のような形態の念誦は説いておらず、サロールハヴァジュラの説く念誦にはアナンガヴァジュラの規定していた念誦の内容は継承されていないことが判明した。さらにアナンガヴァジュラの説く念誦は『ヴァジュラプラディーパー』以降のヘーヴァジュラの伝統の中でその形態を変えつつも継承され、発展していったことを明らかにした。

また、ヘーヴァジュラ系五次第『ヘーヴァジュラプラカーシャ』の「金剛念誦次第」と聖者流の五次第である『パンチャクラマ』の「金剛念誦次第」の内容を比較することによって、『ヘーヴァジュラプラカーシャ』で説かれる念誦には白芥子を用いた気息の観想を行うという点、その際に微細瑜伽と呼ばれる観想を行うという点、その微細瑜伽の後に自加持という観想が意図されている点で『パンチャクラマ』と共通した要素があることを明らかにした。

（３）清浄光明の観想

（１）の『アヌッタラサンディ』に関する項目でも触れたが、聖者流の用いる専門用語として「三智」や「三空」、「清浄光明」などがある。そしてこれらと共通する用語がヘーヴァジュラ系の観想法文献の中にも登場することを、研究代表者は過去の研究の中で明らかにした。その点も

聖者流とヘーヴァジュラ系の影響関係に着目した理由の一つではあるが、具体的な両者を正面から比較した研究は本研究に着手するまで行っていなかった。そこで、それらの共通する用語、特に現世で解脱へ至るための重要な用語・教理である「清浄光明（prabhāsvara-）」を中心に採り上げ、ヘーヴァジュラ系における清浄光明の観想の内容を整理し、その特徴を明らかにするとともに、聖者流におけるそれとの比較作業を行った。

まず、サロールハヴァジュラの著した『ヘーヴァジュラサーダノーパーイカー』には、明確に「清浄光明」という名称の観法は説かれていない。しかし、同テキストへの註釈である『ヴァジュラプラディーパー』ではその内容として 32 の項目に分けて観法を説いているが、その 22 番目の項目に「清浄光明（prabhāsvara-）」という名称の項目が設けられている。その内容には、有情が俱生の状態に入ることが示された上で世尊もまた清浄光明の状態に入ることが示される。その時、行者は俱生の状態を種子の音節と月と太陽が混ざり合ったそれを甘露の自性を持つ光線の集合体の在り方として、五蘊の順番に灯明の頂のように意識しなくなるまで観想するべきであると『ヘーヴァジュラサーダノーパーイカー』へ註釈する形で説く。その中で清浄光明に入っていくとされるわけだが、五蘊の内、色蘊は受蘊に、受蘊は想蘊にといった形で順番に滅していく、これらの観想を意識しなくなるまで行うのである。さらにこの後、ガウリーなどの女神たちの収斂の観想も説かれるが、ガウリーは世尊の色蘊へ消え、チャウリー、ヴェーターリー、ガスマリーはそれぞれ受蘊、想蘊、行蘊へ消え、プッカシー、シャバリー、チャンダーリー、ドーンビーはそれぞれ持金剛の色蘊などへ順に消えていく。そしてその次に「三智の浄化」という文言が登場する。これは聖者流で説かれる三智にほかならず、それらの浄化によってナイラートムヤーなどの三人の女神の本質的な姿があると説かれている。ナイラートムヤーもまた同様に持金剛の識蘊へと収斂され、清浄光明の項目が終了することからこの段階で清浄光明を獲得すると理解することが可能であると思われる。

『アヌッタラサンディ』でもその中で三智の浄化について触れられている。そこでは三空の浄化＝清浄光明＝一切空＝浄化された三智という関係が説かれており、『ヴァジュラプラディーパー』で説かれる三智と清浄光明の関係と同様の内容が説かれていると理解できる。ヘーヴァジュラ系の観想法である『ヘーヴァジュラプラカーシャ』や、サロールハヴァジュラの孫だと自称するバドラパーダの著した『ドヴェーシャヴァジュラサーダナ』などでも同様にガウリーなどの女神たちを五蘊へ収斂させて、清浄光明の状態へと至るという大枠としては同様の観想の手順が説かれていることが明らかになった。『ヴァジュラプラディーパー』以降のサロールハヴァジュラの系統に連なるヘーヴァジュラの伝統では、同テキストに説かれる清浄光明の観法を継承しつつ、各々のテキストの観法を形成していったと考えられる。

聖者流でよく用いられる術語が登場する『ヴァジュラプラディーパー』や『ヘーヴァジュラプラカーシャ』では、その著された 10 世紀から 11 世紀前半頃に亘って聖者流の要素がヘーヴァジュラ系にも取り入れられていったと推測され、母タントラの実践であっても父タントラである聖者流の解釈を組み込んだ儀礼を構築するようになった一つの証左になると思われる。

以上の研究成果によって、父タントラと母タントラを個別に解析するだけではなく、それらを比較し、平行箇処などを同定することによって、従来の研究にはない視点で総合的にインド密教を解析するための有益な知見の一つを提供することが出来たと考える。

今後の課題としては、本研究でも取り上げた「五次第」に着目した研究をさらに進め、究竟次第を中心に父タントラと母タントラの影響関係とそれに伴うインド密教の形成過程を引き続き明らかにすることが挙げられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 松村幸彦	４．巻 243
２．論文標題 Hevajra系成就法所説の念誦―聖者流との関係をめぐって―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 密教文化	６．最初と最後の頁 (91)-(119)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村幸彦	４．巻 87
２．論文標題 インド密教における衆生の解脱	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本佛教学会年報	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村幸彦	４．巻 58
２．論文標題 ヘーヴァジュラ系成就法におけるprabhaasvara	５．発行年 2021年
３．雑誌名 密教学	６．最初と最後の頁 63―78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松村幸彦
２．発表標題 インド密教における衆生の解脱
３．学会等名 日本佛教学会第91回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 松村幸彦
２．発表標題 インド密教における念誦―ヘーヴァジュラ系と聖者流を中心に―
３．学会等名 2019年度密教研究会学術大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関